
緋弾のアリア 輝く焔《シャイニング・ブレイズ》

陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア シャイニング・ブレイズ
輝く焰

【Nコード】

N2190X

【作者名】

陽

【あらすじ】

主人公星守空夜はある日幼馴染のキンジと一緒にチャリジャックに遭い神崎・H・アリアと出会う。そしてそこから物語は始まる

主人公設定（前書き）

これは緋弾のアリアの二次創作小説です。
駄文ですがよろしくお願いします。

主人公設定

主人公設定

名前 ほしもりくうや
星守空夜

性別 男

外見 身長172cm 体重57kg

黒髪黒眼の生粋の日本人のような容姿。
髪の長さは肩に付く位。顔は上の下位。

性格 面白いことが好きでお人よし。困ってる人がいたらなんだからで助けてる。

武偵能力 超偵であるが隠している。理由はS研はめんどくさいから。強襲科に所属しておりランクはS。

普段は右手にはめている4つの指輪で四重に制限しており指輪をはずすことで能力を解放できる。またHSSも使える。リアに会うまでは主に銃を使った戦闘をしていた。

武装 刀 こうえん
光焰

銃 D・E デザートイーグル

CZ75

備考 東京武偵高2年で星守家次男でHSSと超能力が使えるのは家柄。遠山家と星伽家とは繋がりがあある。なのでキンジと白雪とは幼馴染。寮はキンジと同室。

主人公設定（後書き）

星守家や空夜については本編でおいおい書くつもりです。

第1弾 プロローグ

空から女の子が降ってくると思う

か？

昨日キンジがそんなシーンのある映画を観たって言うてたなあ。

アイツは多分そんなのが現実だったら嫌がるだろう。

『武偵なんかやめて平凡な人生を送るっ！』って言う奴だからな。

でも、俺は違う。

平凡な人生なんていつでも送れる。

でも、こんな楽しいことはなかなか訪れない。

正義の味方に仕立て上げられる？

上等！いくらでも悪をつぶしてやるよ！

それに困ってる奴を見捨てるなんて外道にしかできないだろ。

だから俺は空から女の子が降って来てほしい！

した。

なんて思ってたところが俺にもありま

いやさ。よく考えたらさ、命の危険ありまくりじゃん！

そりゃ映画や漫画だったらそんなこと気にせず主人公は向かっていくけどさ。

現実だったらそうはいかない。確かにスリルがあるほうが楽しい。

でもさ！よく考えてみ？大抵そういう敵って人の皮被った化けモンみたいな奴らじゃん！

それはもはやただの人間では敵わない。

『そこの武偵』なんかじゃ絶対にだ。

だけど後悔はしてない。

おかげで大切な仲間もできたし楽しいこともたくさんあった。

だけど！俺はもうこりこりだ。楽しいことは好きだけどこんなに危険なことは何度もできるわけない。

キンジの言うことがよくわかったよ！

!!!!!!!!

もう空から女の子なんて降ってくるな！

第2弾 チャリジャック前編

ピン、ポーン・・・

来客を知らせる慎ましいインターホンの音が部屋に鳴り響く。

この鳴らし方はおそらくあの子だろう。俺は銃の手入れをする手を一旦休めながらそう考える。

ガチャッ

不意に寝室の扉が開き中からいかにも根暗そうな俺の幼馴染が制服に着替えながら出てくる。

こいつの名前は遠山キンジ。俺と同じ能力を持っている。

まあ、オリジナルはキンジの方なのだが。

「おはよう。空夜はまた銃の手入れか？」

「まあな。これから飯を作ろうと思ってたんだが・・・あの子

が来たから多分必要なくなっ たな」

俺は苦笑しながらそう言う。

「・・・ああ」

少し考えて俺の言ったことがわかったらしくキンジが俺の言葉に同意する。

「もう少しで手入れも終わるから先に出てやってくれ」

「わかった」

俺の言葉に頷き玄関の方へ歩いていくキンジ。それを横目に見ながら俺は手入れの最終段階に入る。

「・・・といっても十秒とかからずに終わった。

んでしばらくブーツとしていると玄関の方からキンジともう一人の幼馴染、星伽白雪が手に重箱を持って部屋に入ってきた。

相変わらず白雪は大和撫子を地でいってるな。そんなことを考えていると白雪がリビングにいる俺を見つけて笑顔でこっちに近寄って来た。

「おはよう、クーちゃん」

「ああ、おはよう白雪。また朝ご飯作ってきてくれたのか？」

「うん。だって最近クーちゃんのお世話出来てなかったから」

涙目でそんなことを言ってくる白雪。

「いいんだよ。こうやって朝ご飯作って来てくれるだけでも十分なんだから」

「……（／／）」

笑顔でそう返すと白雪は顔を赤くして固まってしまった。小さいときからこうだ。なんかの病気なのだろうか？

「とりあえず飯食おうぜ、空夜、白雪」

「ん、そうだな」

「う、うん。召し上げれ」

ま、大丈夫だろという結論に達した俺はキンジの促すとおりに飯を食い始める。

白雪の持ってきた弁当は重箱で俺の好物ばかりが詰められていた。

「いつも思うが俺の好物ばかりだな」

「うん。クーちゃんの為に作ってきたからね」

「ハハッ、ホント白雪は空夜思いだな」

「……（／／）」

「？まあ、将来いいお嫁さんになるのは確実だろ」

「・・・・・・・・（そのときはクーちゃんに・・・・・・・・／／）」

「ん、なんか言ったか、白雪？」

「っ！な、何でも無いよっ！」

「なら良いが」

「（はあ、これだから空夜は）」

キンジが溜息を吐いているがどうしたんだろう？ま、いつものことだからいいか。

そうやって会話しているうちに弁当は無くなり、白雪の剥いてくれた蜜柑を食べてキンジはパソコンに向かい、白雪は帰らせて、俺は武装の確認をしながらボーツとしていた。

そうやって何分か経った頃にフト時計を見ると7時57分。

・・・・・・・・・・57？

「ヤベえぞキンジ！もう57分だ！」

ガバツと立ち上がりながら俺は叫ぶ。いつも俺達が武偵高に通うために乗っているバスは58分のバスだ。このままじゃ間に合わないっ！

「あっ！何でいつてくれなかったんだよ、空夜！」

「仕方ないだろ！俺もボーツとしてたんだから！」

そんなことを言い合いながら俺とキンジは急いで戸締りやらなんやらをしながら部屋を飛び出しこれ以上無いくらいのスピードでバス停に向かうがもうバスは行っていた（泣）

このとき俺は５８分のバスに乗れなかったことを半分嬉しく、半分後悔することだろう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2190x/>

緋弾のアリア 輝く焰《シャイニング・ブレイズ》

2011年10月23日19時04分発行